The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	マスウーディー著『黄金の牧場と宝石の鉱山』の第三～第六章をめぐって（4）
Author(s)	竹田，新
Citation	大阪外国語大学論集．1993，8，p．237-253
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79596
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

マスウーディー著『黄金の牧場と宝石の鉱山』の第三〜第六章をめぐって（４）

竹　田　　新

Ⅵ（第五章の翻訳）

第５章　ダビデの子ソロモンの子レハブアム（Arkhubu ʻam）と彼の後に続くイスラエル人の諸王の統治と、諸預言者―彼らの上に平安あれ―の話の要約

（§107）ソロモンの死後、彼の子レハブアムがイスラエル人の王となり、その諸（＝12）支族は彼のところに集まった(1)。その後、ユダ支族とベニヤミン支族以外は、彼から離れてしまった(2)。彼は亡くなるまで、17年間王位にあった(3)。そしてヤロブアム（Yūrubu ʻam）が10支族の王となった(4)。彼は様々な事件や戦争を起こし、黄金と宝石でできた子牛を取り入れて、それを崇めることに耽ったので、アッラーは彼を滅ぼし給うた(5)。彼は20年間王位にあった(6)。彼の後、ソロモンの子レハブアムの子アビヤム（Abyâ）が３年間王位にあり、その後はアハブ（Akhāb）が40年間王位にあった(7)。彼の後はヨラム（Yūrâm）が王となり、偶像、彫像、画像を公然と崇めた(8)。彼は王位に【８年間あり、その後は、アハズヤ（Akhaziyâ）が王位に】１年間あった(9)。

（§108）その後アタルヤ（ʻAtâliyâ）と呼ばれる女性がイスラエル人の王となり、ダビデの子孫たちを刃にかけたので、１名の少年しか残らなかった(10)。イスラエル人は彼女のこの行為を非難し、彼女を殺した(11)。彼女は７年間王位にあった(12)。その他の説もある。そして、ダビデの子孫で残っていたかの少年を王位につけ、その少年は７歳で王となった(13)。彼は40年間王位にあった(14)。それ以下との説もある。彼の後はアマツヤ（Amaṣiyâ）が王となり、王位にあったのは【29年間で、その後はウジヤ（ʻUziyâ）が王となり、王位にあったのは】52年間であった(15)。彼の時代に、預言者イザヤ（Isha ʻyâ）―彼の上に平安あれ―がいた(16)。イザヤには、ウジヤとの数多くの話がある。ウジヤは、我らが『時代の情報』の書の中で述べた幾つかの戦争を行なった。彼の後、その子ヨタム（Yûtām）が10年間王位にあった(17)。16年間という説もある。その後はアハズ（Aḥāz）が王となり、偶像類を公然と崇め、暴政を行ない、邪悪なことを公然と行なった(18)。そこで、バビロンの王たちの或る者が彼のところへ進んだ(19)。その者は［ティグラト・］ピレセル（Fal ʻasar）と呼ばれ、バビロンの偉大な王たちの一人であった。かのイスラエル人（＝アハズ）はこのバビロン人と幾度か戦闘を交えたが、このバビロン人が彼を捕虜とし、

諸支族の町々と彼らの居住地を破壊する結果に終わった。

（§109）アハズの時代にユダヤ人の間に宗教論争が生じ、彼らの中からサマリア人（Asâmirah）が離れ、ダビデと彼の後に続く預言者たちの預言力を否定し、モーセの後に預言者が存在することを否認した[20]。そして自分たちの指導者たちがアムラムの子アロンの子孫に属するとした。サマリア人は今日、すなわち332年、パレスティナとヨルダンの地に分散する村々、例えばラムラ（ar-Ramlah）とティベリアスの間にあるアーラー（'Ârâ）の名で知られる村や、ナブルス（Nâbulus）の町に至る途中にあるその他の村々にも住むが、大半はこの町に住んでいる[21]。彼らにはトゥール・バリーク（Ṭûr Barîk,「祝福された山」の意）とよばれる山があり、時間になると、その山上で礼拝が行なわれる[22]。彼らは銀製の笛を所持し、それをこうした礼拝の時間に吹く。彼らは「"触るな"」と言う者たちである[23]。人々が主張するところでは、ナブルスは聖殿であり、ヤコブの町で、彼の牧草地がある[24]。サマリア人は相異なる2派に分かれ、その違いは彼らと他のユダヤ人との違いに等しい。一方の派はクーシャーン（al-Kûshân）、他方はドゥースターン（ad-Dûstân）と呼ばれる[25]。一方の派は世界の無始（qidam）や、我らが冗長を恐れて述べなかった、その他の考えを口にする[26]。ちなみに、本書は話をそのままに伝える書で、思想や信条の書ではない。

（§110）アハズはかのバビロン人（＝ティグラト・ピレセル）が彼を捕虜にするまで、17年間王位にあった[27]。彼が捕虜になった時、彼の子でヒゼキヤ（Ḥazaqiyâ）と呼ばれる者が王となった[28]。ヒゼキヤは慈悲深きお方(＝アッラー)をはっきりと崇め、彫像や偶像の破壊を命じた[29]。ところが、彼の治世にバビロンの王センナケリブ（Sannajarîb）がエルサレムに向かって進み、イスラエル人と数多くの戦闘を交えた[30]。イスラエル人はセンナケリブの仲間を多数殺したが、センナケリブは諸支族の多数を捕虜にした[31]。ヒゼキヤは亡くなるまで、29年間王位にあった[32]。

（§111）ヒゼキヤの後、マナセと呼ばれる息子が王になると、マナセの悪行が王国の全住民を覆った[33]。彼は預言者イザヤ—彼の上に平安あれ—を殺した者であり、アッラーは彼のところにルーム（ar-Rûm）王コンスタンティヌス（Qusṭanṭîn）を差し向けた[34]。コンスタンティヌスは軍隊を率いてマナセのところに進み、マナセの軍を敗り、マナセを捕虜にした。マナセはルーム人の手中に20年間留まり、元の行状を捨て去り、王位に戻った[35]。彼は亡くなるまで、25年間王位にあった[36]。30年間という説もある。

（§112）その後、アモン（Amûn）という彼の息子が王となったが、暴政を公然と行ない、慈悲深きお方を信じず、彫像や偶像を崇めた[37]。アモンの暴虐がひどくなった時、'足の不自由なファラオ'がエジプトの地から軍隊を率いて彼のところに進み、多数の者を殺し、彼を捕虜にして、エジプトに連れ去った[38]。その結果、アモンはこの地で亡くなり、王位にあったのは5年間であった[39]。また、その他の説もある。そして、彼の後、兄弟のヨヤキム（Yû'âqîm）なる者が王となった[40]。ヨヤキムは預言者ダニエル（Dâniyâl）—彼の上に平安あれ—の父に当

たる[41]。

（§113）この王の時代に、ネブカドネツァル（al-Bukht Naṣṣar）が襲来した[42]。ネブカドネツァルはペルシア（Fâris）王の任命したイラーク（al-'Irâq）と西方（al-Maghrib）の総督（marzubān）であり、ペルシア王は当時、王都のバルフ（Balkh）にいた[43]。ネブカドネツァルはイスラエル人を多数殺したり捕虜にし、捕虜たちをイラークの地に連れて行った[44]。また、トーラーや、エルサレムの神殿にあった預言者たちの書や王たちの伝記を奪い取って、一つの井戸に投げ込んだり、御姿の聖櫃を取りに行って、それをイラークの地の或る場所に置いたりした[45]。捕虜になったイスラエル人の数は18000名であったと言われる[46]。この時代に預言者エレミヤ（Irmiyâ）—彼の上に平安あれ—がいた[47]。ネブカドネツァルはエジプトに進み、当時のエジプト王、かの'足の不自由なファラオ'を殺した[48]。更にマグリブ（al-Maghrib）の方に進み、王たちを殺し、町々を征服した[49]。

（§114）ペルシア王はイスラエル人捕虜の若い女性と結婚し、男の子をもうけた。それで、ペルシア王はイスラエル人を何年かぶりに彼らの故郷へ帰した[50]。イスラエル人は国に戻ると、シェアルティエル（Salatiyâl）の子ゼルバベル（Zurubābīl）を自分たちの王とした[51]。ゼルバベルはエルサレムの町を建て［直し］、荒廃していたものを復興した。そしてイスラエル人は例の井戸からトーラーを引き上げ、事態は彼らにとって正常になった[52]。この王は46年間、彼らの地を繁栄させることに没頭し、礼拝ほかの、捕囚状態で失われていた掟を彼らに定めた[53]。

（§115）サマリア人（as-Sāmirīyah）の主張するところでは、まず、ユダヤ人の手にあるトーラーはアムラムの子モーセ—彼の上に平安あれ—がもたらしたトーラーではなく、歪められ、手を加えられ、変えられたものである。また、ユダヤ人の手にあるこの書をつくったのは上述のこの王で、彼はそれを暗記しているイスラエル人から集めたのであり、正しいトーラーはサマリア人だけの手にあるものである。この王は亡くなるまで、46年間王位にあった[54]。私は他の写本の中で、イスラエル人と結婚したのはネブカドネツァルその人で、彼がイスラエル人を帰し、彼らに恩恵を与えた者であることを見い出した[55]。

（§116）'［アッラーの］友'アブラハムの子イシュマエルがアブラハムの後、御館（＝カアバ）を管理した[56]。アッラーはイシュマエルを預言者となし、彼をアマレク人とイエメン（al-Yaman）の諸部族のもとに遣わし給うた[57]。彼が偶像崇拝を彼らに禁じると、一部の者は信じたが、大半の者は信じなかった。イシュマエルには12名の息子が生まれた。ネバヨト（Nābit）、ケダル（Qīdār）、アドベエル（Adbīl）、ミブサム（Mibsam）、ミシュマ（Misma'）、ドマ（Dūmā）、マサ（Massā）、ハダド（Ḥadār）、テマ（Thīmā）、エトル（Yaṭūr）、ナフィシュ（Nāfis）、ケデマ（Qidmā）である[58]。アブラハムは息子のイシュマエルを受遺者となし、イシュマエルは兄弟のイサクを受遺者にした[59]。イシュマエルは息子のケダルを受遺者にしたという説もある。イシュマエルは137歳でアッラーに召され、聖モスクの黒石がある場所に葬られた[60]。彼の後、息子のネバヨトが彼のやり方を踏襲して、御館を管理した[61]。また、ネバヨト

が父イシュマエルの受遺者であったという説もある。

（§117）ダビデの子ソロモンとキリスト―彼の上に平安あれ―との間には、預言者たち、敬虔な者たち、正しき者たちがいた。彼らの中には、エレミヤ、ダニエル、エズラ（'Uzayr）がおり、エズラに関しては、彼の預言力をめぐって人々の論争がある(62)。また、ヨブ、イザヤ、エゼキエル、エリヤ（Ilyās）、エリシャ（al-Yasa' 或は Alīsa'）、ヨナ、ズー・ル＝キフル（Dhū al-Kifl）、ヒドルもおり、ヒドルに関しては、エレミヤであるとイブン・イスハーク（Ibn Iaḥāq）は語ったが、或る正しき僕だとの説もある(63)。そして、ザカリア（Zakarīyā）がいる。彼はユダ支族のダビデの子孫のアダク（Adaq）の子ザカリアであり、アムラムの娘でキリストの母たるマリア（Maryam）の姉妹エリサベト（Ishbā'）と結婚していた(64)。アムラムもまたダビデの子孫で、ヨヤキムの子マーラーン（マタン？Mārān）の子に当たる(65)。そしてエリサベトとマリアの母の名はハンナ（Ḥannah）である(66)。エリサベトはザカリアにヨハネ（Yaḥyā）を生み、ヨハネはキリストの母方のおばの子に当たった(67)。

（§118）ザカリアは大工であったが、ユダヤ人は彼がマリアと姦通したと噂を広め、彼を殺［そうと］した(68)。彼はユダヤ人のもくろみを感じ取った時、一本の木に逃れ、その木の中に入った(69)。ところが、アッラーの敵イブリースは彼のことを彼らに示したので、彼らはその木を彼が中に入ったまま挽いて、切り倒し、彼を一緒に切ってしまった(70)。アムラムの娘で、キリストの母マリアの姉妹に当たるエリサベトはザカリアの子ヨハネを生んだ時、ヨハネを連れて或る王のもとからエジプトへと逃れた(71)。ヨハネが成人した時、アッラーは彼をイスラエル人のもとへ遣わし給うた。ヨハネが彼らの中でアッラーの命令と禁令を実行すると、彼らは彼を殺してしまった(72)。多くの出来事がイスラエル人に起こったが、アッラーは彼らのところに東方からハルドゥーシュ（ヘロデ？Khardūsh）と呼ばれる王を遣わし給うた(73)。この王はザカリアの子ヨハネの血が沸き立つ中で、その血の贖いに彼らを幾千名も殺し、長い災難の後でその血はようやくにして静まった(74)。

（§119）アムラムの娘マリアが17歳に達した時、アッラーは彼女のもとにガブリエルを遣わし給うた(75)。ガブリエルが彼女に聖霊を吹き込むと、彼女はイエス（'Īsā）・キリスト―彼の上に平安あれ―を身ごもった。そして、エルサレムから何マイルか離れたベツレヘムと呼ばれる村でイエスを生んだ。イエスは12月24日の水曜日に生まれた(76)。彼に関しては、アッラーが御啓典の中で述べ給い、御預言者ムハンマド―アッラーが彼を祝福し、救い給うように―の舌を通して明らかになし給うた事柄が起こった(77)。キリスト教徒は以下のように主張している。ナザレ人（an-Nāṣirī）イエス（Īshū'）、すなわちキリストはヨルダンの地のティベリアスの町にある、ミドラス（al-Midras）と呼ばれるシナゴーグ（kanīsah）で30年間、あるいは29年間、トーラーや以前の諸啓典を読んで、これまでの彼の民の宗教を守っていたが、或る日、イザヤの巻物（sifr）を読んでいると、その中に、『汝は我が息子、我が心に適いし者、我がために我は汝を選んだ』と光で書かれたものを見付け、その書を閉じて、かのシナゴークの従僕にそれを手渡し、

『今や、アッラーの御言葉が人の子の中に実現した』と言いながら、出て行った(78)。また、キリストがヨルダン地方のラジューン（al-Lajūn）の地のナザレ（Nāṣirah）と呼ばれる村にいたので、ナスラーニーヤ(キリスト教, an-Naṣrānīyah)という呼び名ができたという説もある(79)。

（§120）私はこの村でキリスト教徒が崇敬する教会を見たが、その中には、死者たちの骨が入った、石でできた幾つかの櫃があり、それらからは、キリスト教徒が祝福される、シロップのような濃い油が流れ出る。キリストがティベリアス湖のそばを通ると、ゼベダイ（Zabadā）の息子たちである漁師たちと12名の洗張り屋が湖上にいた(80)。そこでキリストが彼らをアッラーへと招き、『私について来なさい。人間の心を捕まえるだろう』と言うと、ゼベダイの息子たちである3名の漁師と、12名の洗張り屋は彼に従った。

（§121）人々が述べたところでは、マタイ（Mattā）、ヨハネ（Yūḥannā）、マルコ（Mārqush）、ルカ（Lūqā）は、福音書を伝え、その中で以下のことを語った4名の使徒（al-ḥawārīyūn）である。キリストの話と、彼の生誕に関すること、ザカリアの子ヨハネ、すなわちバプテスマの（al-ma'madānī）ヨハネがティベリアス湖、あるいはティベリアス湖から流れ出し、'悪臭を放つ湖'に流れ込むヨルダン川において、彼に洗礼を授けた方法、キリストが行なった驚くべき事柄と彼がもたらした奇跡、アッラーが彼を33歳の時に"御許に召し上げ給う"まで、彼がユダヤ教徒から受けた仕打ちである(81)。また、福音書には、キリストとマリアと大工ヨセフに関する長い苦難話があるが、アッラー—いと高くおわす—がそれらについて何も告げ給わず、御預言者ムハンマド—アッラーが彼を祝福し、救い給うように—も告げなかったので、我らはそれらについて述べることを差し控えた(82)。

Vの注の続き

(119) "7年〈と3か月〉"が'Abd al-Ḥamīd版では"9年〈と3か月〉"。士師記6:1やYa'qūbī（I,p.49）ではミディアン人が、Ṭabarī（I,p.546）ではロトの子孫の一団が、どちらも7年支配したとある。オレブとゼエブは士師記7:25参照。残りの3名は不明［最後のサルターは、士師記8:5以下に登場するミディアン人の2王ゼバとツァルムナのうちの後者か］。

(120) ギデオンの血統は士師記6:15、期間は同8:28、行為は同7:25と8:21と同様。尚、Ya'qūbī（I,p.49）ではマナセ支族のヨアシュ（Yuwās）の子ギデオン（Jad'ān）が、Ṭabarī（I,p.546）ではナフタリ支族のヨアシュ（Yuwāsh）の子ギデオンが、40年統治したとある。

(121) 士師記9:22以下や、Ya'qūbī（I,p.49）、Ṭabarī（I,p.546）ではアビメレク（Abīmalak）が3年統治したとある。トラは士師記10:1やYa'qūbī（I,p.49）では、イサカル（Yashājar）支族のプア（Fuwāy）の子トラ（Tāla'）、Ṭabarī（I,p.546）ではプア（Fuwā）の子で、アビメレクの母方のおじの息子トラ（Tūlagh）とある。彼の期間は士師記10:2やYa'qūbī（I,p.49）、Ṭabarī（I,p.546）と同様。

(122) ヤイルは士師記10:3ではギレアド人とあり、Ṭabarī（I,p.546）ではイスラエル人ヤイル（Yā'ir）とある。尚、Ya'qūbī（I,pp.49～50）では、ヤイルに代わって、マナセ支族のギレアド（Jal'âd）が来る。ヤイルの期間は士師記10:3や、Ṭabarī（I,p.546）と同様［Ya'qūbīではギレアドが、同年数］。次のアンモン人王たちの期間も士師記10:8や、Ṭabarī（I,p.546［'Ammūn］）と同様。尚、'Abd al-Ḥamīd版では"18年間"に、括弧扱いだが、"3か月"が加わる。Ya'qūbī（I,p.50）ではアンモン（'Ammūn）人が17年とある。士師記11～12章［特に12:7］や、Ya'qūbī（I,p.50）、Ṭabarī（I,p.547）に従えば、アン

モン人王たちとイブツァンとの間に6年治めたエフタ（Yaftaḥ）が入り、イブツァンの出自は士師記12:8と同様。Ya'qūbī(I,p.50)ではBajshūn(*sic* Nakhsūn)と呼ばれるイブツァン（Abīṣān)、Ṭabarī（I,p.547）ではイスラエル人Bajshūnとある。イブツァンの期間は士師記12:9や、Ya'qūbī（I,p.50)、Ṭabarī（I,p.547）と同様。'Abd al-Ḥamīd版では"その後はサムソン…それぞれ治めた。"が括弧扱い。士師記13〜16章［特に15:20］や、Ya'qūbī（I,p.50)、Ṭabarī（I,p.547）に従えば、サムソン（Shamsūn）は次文のペリシテ人王たちの時代に20年治めたとなる。アムラフは士師記12:11のエロン（Alūn）のことではなかろうか。その統治期間10年は、士師記12:11のエロンのそれと同様。Ya'qūbī（I,p.50）ではゼブルン（Zabūlūn）支族のエロン（Îlān）が20年、Ṭabarī（I,p.547）にはエロン（Alūn）が10年とある。アジュラーンは、士師記12:13のアブドン（'Abdūn）であろうか。Ya'qūbī（I,p.50）では'Akrān、Ṭabarī（I,p.547）ではKayrūn或いは'Akrūnと綴られ、いずれも統治は、士師記12:14のアドブンと同様に8年。

(123) ペリシテ人王たちの期間は士師記13:1や、Ya'qūbī（I,p.50)、Ṭabarī（I,p.547）と同様。そして聖書他では上記（注122）のサムソンが続き、その後は、士師記18〜21章、Ya'qūbī（I,p.50)、Ṭabarī（I,p.547）などでは統治者不在の期間となる［但し、Ya'qūbīでは12年間、Ṭabarīでは10年とある］。サムエル記上4:18にあるエリの期間や、Ya'qūbī（I,p.50）の'Âlī、Ṭabarī（I,p.547）の'Alīの期間と同様。

(124) 聖書ではエリの時代はペリシテ人が聖櫃（主の契約の箱）を奪った（サムエル記上4:11）とあり、エゼキルの時代に起こったバビロニア人による捕囚（列王記下25章）は500年以上後のことである。マスウーディー5章§113にネブカドネツァル（Bukht Naṣṣar）による捕囚の記述がある。

(125) Ibn Qutayba（p.51）に、ブジ（Būdhī）の子エゼキエルの民を疫病が襲い、彼らは死を恐れて幾千人もが自分の家から出て行き、アッラーは彼らに死ねと言い給い、その後甦らせ給うたとあり、マスウーディーの以下の記述と同一の話である。

(126) 引用部はクルアーン2:243。Ṭabarī（I,pp.536〜40）では、やはりエゼキエルにまつわる話とするが、内容は"枯れた骨の復活"（エゼキエル書37:1〜14）である。

(127) 'Abd al-Ḥamīd版では、"海上の島々"と"山々の高所"との順序が入れ代わっている。

(128) 'Abd al-Ḥamīd版では、"7日後"が"7日間"。

(129) サムエル記上1:1,1:20では、サムエルはエルカナの子で、エルカナがエロハムの子、そしてエロハムはエリフの子である。Ibn Qutayba（p.44）ではエルカナ（Halqânâ）の子サムエル、Ṭabarī（I,p.547）ではツフ（Ṣûf）の子トフ（Tâhu）の子エリフ（Alîhû）の子エロハム（Yarûkham）の子エルカナ（'Alqamah）の子バーリー（Bâlî）の子サムエル（Shamwîl）とある。"預言者と称した（tanabba'a)"が、'Abd al-Ḥamīd版では"（nubbi'a）"だが、サムエル記上3:20や使徒言行録13:20も参照［サムエルは最後の士師で、最初の預言者］。

(130) 引用部はクルアーン2:246。サムエル記上8:19〜20参照。

(131) サウルの系譜に関して、ベニヤミンの子ベラは創世記46:21、アフィア以降はサムエル記上9:1〜2と一致する。Ṭabarī（I,p.559）では、途中、ベニヤミンの子アイシュ（Aysh）の子アフィアとなる以外は同じ。Ibn Qutayba（p.45）ではWahbに拠り、ヤコブの子ベニヤミン支族に属するとだけある。クルアーン2:247〜48とサムエル記上10〜11章参照。

(132) Ibn Qutayba（p.57）ではモーセとダビデの間が500年とあり、列王記上6:1には、エジプト脱出とソロモンによる神殿の建築着手との間が480年とある。一般には、出エジプトはアメンホテプ2世王時代（前1438〜12年）からメルネプタ（或いはメレンプタ）王時代（前1223〜11年）までの間にあったと考えられており、サウルが王位に就いたのは前1020年とされる。

(133) Wahbに拠ると言うIbn Qutayba（p.45）では、サウルはロバ飼い、Ṭabarī（I,p.549）では水の運搬人とある。引用部は共にクルアーン2:247。後の"云々"が、'Abd al-Ḥamīd版では"彼は言った、「アッラーはお前たちの上に彼を選び、彼の知識と身体とをますます豊かにし給うた」"（クルアーン2:247)。前の引用部はサムエル記上10:24、後の引用部はサムエル記上10:27をそれぞれ参照。またIbn Qutayba（p.45）では、サムエルが彼らに、サウルはお前たちの王で、ベニヤミン支族に属すると告げると、彼らはこの支族には王権も預言力もないことをお前は知っているのにと言ったとある。Ya'qūbī（I,p.50）

でも、彼らはサウルは王権と預言力を持つ支族に属さない、彼はレビ族にもユダ族にも属さず、ベニヤミン支族に属すると言ったとある。

(134) 引用部はクルアーン2:248。Ibn Qutayba (p.45) ではサムエルは彼らに、お前たちとアッラーとどちらがよくご存じか、お前たちはアッラーがサウルをお前たちの上に遣わし給うた時、彼の血統をご存じであったことを知らなかったのかと言ったとある。Ya'qūbī (I,p.50) でもサムエルは彼らにお前たちはアッラーよりも選ぶ権利を持っていないと言ったとある。

(135) Ṭabarī (I,p.550) では、Ibn 'Abbâs などに基づき、人々の見ている前で天使が櫃を運ぶという記述がある。

(136) ゴリアトは聖書ではガド出身のペリシテ人戦士（サムエル記上17:4,17:23）とあり、聖書に準ずるYa'qūbī (I,p.51) では星辰崇拝者軍の一人とあるが、マスウーディーは§93でもベルベル人の王としている。またṬabarī (I,p.548) では、Ibn Mas'ūd 他に基づき、アマレク人の王とある。

(137) "出て来ること"が、'Abd al-Ḥamīd 版では"進むこと"。

(138) 次文までクルアーン2:249参照。

(139) 聖書ではサウルとゴリアトの戦いではなく、ギデオンとミディアン人の戦いにまつわる話（士師記7:1～7）である。Ṭabarī (I,pp.550～51) では次のような話となっている。80000名がサウルと共に出陣したが、彼らはゴリアトを恐れて川の水を飲み、4000名だけがサウルと共に川を渡り、残りの76000名は引き返してしまった。川の水を飲んだ者たちは喉が渇いたが、手の平以外では飲まなかった者たちは渇きが癒えていた。しかしゴリアトを見ると、3681名が引き返し、サウルと行動を共にした者319名となった。この数はバドル (Badr) の人々［624年メディナの南西、バドルでメッカのクライシュ族を敗ったムハンマド軍］の数である。

(140) "選んだ (faṣ(ṣ)ala)"が、'Abd al-Ḥamīd 版では"好んだ (faḍ(ḍ)ala)"。313名は上記の注139の後半部参照。尚、Ṭabarī (I,p.559) にはダビデの系譜が記され、彼はアブラハムの子イサクの子ヤコブの子ユダの子ペレツ (Fâris)［創世記38:29］の子ヘツロン (Ḥaṣrūn) の子ラム (Râm) の子アミナダブ ('Amī Nâdab) の子ナフション (Naḥshūn) の子サルマ (Salmūn) の子ボアズ (Bâ'az) の子オベド ('Awbid) の子エッサイ (Īshâ) の子［ルツ記4:18～22］となる。

(141) "衝突した (tawâqafa)"が、'Abd al-Ḥamīd 版では"均衡した (tawâfaqa)"。

(142) サムエル記上17:25（"財産の3分の1"が"大金"）や、Ṭabarī (I,p.555、"財産の3分の1"が"権限の代行"）参照。

(143) サムエル記上17:49～50や、Ya'qūbī (I,pp.51～52)、Ṭabarī (I,pp.555～56) と同様。

(144) 引用部はクルアーン2:251。"云々"が、'Abd al-Ḥamīd 版では欠けている。

(145) 聖書では5個の石（サムエル記上17:40）のうち1個で倒す（同17:49～50）。Ya'qūbī (I,p.52) は聖書と同様だが、Ṭabarī (I,p.555) ではマスウーディーと同様、3個の石が一つになったもので倒す。

(146) "それがぴたり合う者"が、'Abd al-Ḥamīd 版では"例の胃を身につけた時、それがぴたり合う者"。Ṭabarī (I,p.555) にもサムエルが用意したゴリアトを殺す者の付ける角と胸当てとがダビデだけに合ったという記述が見られる。サムエル記上17:38～39（ダビデはサウルの装束を脱ぎ去る）参照。"泡立つ音を立てる川"が、'Abd al-Ḥamīd 版では"彼（＝ダビデ）の頭上で泡立つ音を立てる川"。"系譜 (ansâb)"が、'Abd al-Ḥamīd 版では"事柄 (sha'n)"。

(147) 以下、サウルとダビデの話は、サムエル記上18～24章、26～28章や、Ya'qūbī (I,p.52)、Ṭabarī (I,pp.556～58) 参照。次文にある3分の1ずつの記述は、上記の3文献のいずれにも見られない。尚、Ibn Qutayba (p.45) では Wahb に拠り、ダビデがサウルの娘と結婚したという記述のみ、両者間の話として挙がっている。

(148) 聖書ではサウルがダビデを妬み、付け狙うのは結婚やマスウーディーの言う贈与以前からである。

(149) サウルの死に関しても、Ya'qūbī (I,p.53) もṬabarī (I,p.559) もマスウーディーとは異なり、サムエル記上31:4や歴代誌上10:4（ギルボア山でペリシテ軍と戦い、戦死）と同様な記述しかない。またサムエル記下5:5やYa'qūbī (I,p.53) では、ダビデはまずユダの王、次いで7年［半］後にイスラエルの王にもなる。

(150) サウルの統治は使徒言行録13:21や、Ya'qûbî (I,p.53)、Ṭabarî (I,p.559) では40年とある。

(151) Pellatの改訂版ではゴリアトをサウルに変えているが、この箇所は'Abd al-Ḥamîd 版など旧来の版に従った。ガウルは本Ⅴ注87、バイサーンはⅣ（第3章）注54を見よ。

(152) クルアーン34:10〜11,21:80やṬabarî (I,p.562) 参照。

(153) クルアーン34:10,38:18〜19,21:79やṬabarî (I,p.562) 参照。

(154) モアブと戦うはサムエル記下8:2やYa'qûbî (I,p.54) 参照。

(155) クルアーン4:163,17:55参照。詩編が150章というのは聖書（詩編）に沿う。

(156) この内容は詩編とは見なし難く、敢えて言えばイザヤ書により近い。Ya'qûbî (I,pp.57〜59) は詩編と言い得る内容である。尚、マスウーディーに登場するネブカドネツァルは、次章の§113のように、ペルシア王配下のイラークと西方の総督（§545も）か、聖書（列王記下25:1）と同様、バビロンの王（§526）である。

(157) Ya'qûbî (I,p.53) では、バイトル・マクディスに或る manzil（宿、家）を建てたとあり、Ṭabarî (I,p.572) では、Wahb に拠る説として、ダビデは masjid（礼拝所）を建てようとしたが、アッラーはダビデの手が血で汚れているので、建設を許さなかったとある。

(158) "知られている"が、'Abd al-Ḥamîd 版では"呼ばれている"。またダビデのミフラーブはクルアーン38:21参照。

(159) "その上からは本書で前述した"が、'Abd al-Ḥamîd 版では"その上では、前述した"。'悪臭を放つ湖'とヨルダン川の前述とは、§§89〜90のこと。

(160) クルアーン38:22〜26参照。またサムエル記下12:1〜23も参照。

(161) 引用部はクルアーン38:24。

(162) 引用部はクルアーン38:26。

(163) ウリヤの物語はサムエル記下11:2〜26参照。Ḥayyânは、Ibn Qutayba (p.46) やYa'qûbî (I,p.55) では Ḥannân とあり、"創始の書"は'Abd al-Ḥamîd 版では複数形でなく、単数形。更に、"述べられた"が、"我らが述べた"。ウリヤの殺害とそれを2名の口論者の姿で論す2天使の話とその結果［＝本書の次文］が Ya'qûbî (I,pp.55〜56) や、更に様々な見解をもってṬabarî (I,pp.564〜70) に記されている。

(164) Ṭabarî (I,pp.566,569) 参照。

(165) Ṭabarîには99名の妻 (I,pp.564,566,568) とウリヤの前妻 (I,pp.565〜67) の計100名の妻とある。

(166) クルアーン21:78〜79や Ṭabarî (I,p.573〜74) 参照。

(167) 引用部はクルアーン21:79であり、"云々"が'Abd al-Ḥamîd 版では欠けている。列王記上5:9やクルアーン27:15も参照。

(168) ソロモンの王位継承は列王記上1:29〜30,33〜35やYa'qûbî (I,p.60) 参照。ダビデの没年は、サムエル記下5:4では70歳、Ya'qûbî (I,p.60) では120歳、Ṭabarî (I,p.572) では100歳や77歳となる。更に、次文にあるその統治期間はサムエル記下5:4や列王記上2:11、Ya'qûbî (I,p.60)、Ṭabarî (I,p.572) と同様。

(169) "楯"が'Abd al-Ḥamîd 版では欠けている。

(170) ルクマーンについては本稿Ⅳ（第3章）注7も参照。創世記25:4にミディアンの子エファが登場するが、その場合のミディアンは§80の通り、アブラハムの子である。

(171) アル＝カイン (al-Qayn) を、Meynard と Courteille はルカイン (Luqayn) と読んでいる (*Maçoudi*,I, p.111)。Iba Qutayba (p.55) では、賢人ルクマーンは或るイスラエル人のアビシニア人 (Ḥabashî) 奴隷で後に解放され、ダビデの時代にいたとある。尚、Ya'qûbî やṬabarî にはこのルクマーンは登場しない。

(172) "〈遣わされた〉まで (ḥattâ)"が、'Abd al-Ḥamîd 版では"〈遣わされた〉時 (ḥîna)"に、"住民"が、"地"になっている。ヨナは聖書のヨナ書の記述 (1:1,3:3など) に一致し、彼の時代は紀元前800年頃とされている。尚、クルアーン10:98や37:139〜48にヨナ書に準じた記述が見られる。

(173) 主の神殿建設は列王記上6参照。"アッラーがその周りを祝福し…"はクルアーン17:1参照。

(174) 王の宮殿建設は列王記上7参照。“〈呼ばれる〉もの”が、‘Abd al-Ḥamîd版では“〈呼ばれる〉場所”となっているが、この教会は聖墳墓教会を指す。ムスリムたちはal-Qiyâmah（“復活”）の代わりに、al-Qumâmah（“くずの山”）と呼んで、異を唱えていた（Haïm Z'ew Hirschberg, “Jerusalem”, *Encyclopaedia Judaica*, Ⅸ, p.1441)。

(175) シオン教会はイエスの最後の晩餐の場所とされ、低い場所にある聖墳墓教会と対比して「上の教会」と呼ばれたもので、今日の「コエナクルム（高間)」は14世紀に建てられたものである（旧約・新約聖書大事典，教文館，1989, pp.234～35)。他方、ジュスマーニーヤはゲツセマネが訛ったものと思われ、al-Jasmânîyahと読むべきだろうが、Pellatは受肉（incarnation）の意にとっている（*Mas'ûdî*, I, p.46)。

(176) クルアーン21:81, 27:16～17, 34:12～13, 38:36～37参照。“以前の”が‘Abd al-Ḥamîd版では“人間の”。

(177) この後に、‘Abd al-Ḥamîd版では“アッラーは成功を授け給うお方である”という文が続く。彼の統治期間は列王記上11:42や、Ya'qûbî（I,p.64）と同様。また、マスウーディーによると、ソロモンはイエメンを女王ビルキース（Bilqîs）の後、23年間統治した（§§1004, 1027）とあるが、これは列王記上10:1～13、歴代誌下9:1～12や、クルアーン27:23～44に登場するソロモンとシェバ（Saba'）の女王の話に因む。彼の没年はYa'qûbî（I,p.64）と同様。

Ⅵ の 注

都合で、前稿までの“イスラエルの子ら”を、今後は“イスラエル人”と改訳する。

（1）列王記上11:43～～12:15、歴代誌下9:31～～10:15参照。Ya'qûbî（I,p.64)、Ṭabarî（I,p.619）と同様。

（2）列王記上12:16～24、歴代誌下10:16～～11:4参照。Ya'qûbî（I,p.65)と同様。Ṭabarî（I,p.619）ではレハブアムの後、イスラエル人の王国は分裂したとある。

（3）列王記上14:21、歴代誌下12:13や、Ya'qûbî（I,p.65)、Ṭabarî（I,p.619）も同様。

（4）列王記上12:20やYa'qûbî（I,p.65)、Ṭabarî（I,p.619［但し、ヤロブアムはソロモンの召し使いNabatの子］）と同様。

（5）列王記上12:28～～13:34,14:30,15:6～7、歴代誌下11:15,12:15,13:2～20や、Ya'qûbî（I,pp.65～66）と同様。

（6）列王記上14:20では22年だが、Ya'qûbî（I,p.66）はマスウーディーと同じ。

（7）前半部は、列王記上15:1（ヤロブアム王の治世にアビヤムがユダの王となる)、歴代誌下13:1に従えば、“彼”とはレハブアムになり、Ṭabarî（I,p.619［但し、期間の記載なし］）も同様だが、マスウーディーでは、文脈から考えると、“彼”とはヤロブアムを指しているのではなかろうか。その他の点では、前半部の記述はマスウーディーも列王記上14:31,15:2、歴代誌下12:16,13:2と同様。そしてYa'qûbî（I,p.66）もマスウーディーに近い記述である。後半部は、列王記上15:8～10や歴代誌下14:1, 16:13ではアビヤムの子アサがユダの王として41年世を治めたとあり、Ṭabarî（I,p.619）もアサ（Asâ）が同様。Ya'qûbî（I,p.66）ではアサが40年［ユダの王という記述なし］。マスウーディーが挙げるアハブは、列王記上16:29ではユダの王アサの時代にイスラエルの王となり、22年治めた人物である。

（8）列王記下3:1ではアハブの子ヨラムはイスラエルの王となり、12年世を治め、主の目の前に悪を行なったとあり、列王記下8:16～18にはこのイスラエル王ヨラムの時代に、先のアサの子ヨシャファトの子ヨラムがユダの王となり、8年世を治め、主の目の前に悪を行なったとある。マスウーディーは2名のヨラムを混同している。Ya'qûbî（I,p.66）では聖書（列王記上15:24, 22:42, 22:50）と同様、アサの後、その子ヨシャファト（Yahûshâfaṭ）が25年治め、その後、ヨシャファトの子ヨラム（Yûrâm）が登場する。彼は不信者となり、民を偶像崇拝に引き戻したとある。Ṭabarî（I,p.637）ではアサの後、その子ヨシャファトが25年、その後は、アハズヤの母に当たる下記のアタルヤが支配するとあり、下記の注12参照。“画像”が‘Abd al-Ḥamîd版では括弧扱い。

（9）【　】はPellatによるもので、この訳出部分は‘Abd al-Ḥamīd版にはない。前半部は、上記のとおり、アサの子ヨシャファトの子ヨラム［ユダの王］ならば、在位は聖書（列王記下8:16〜18）と同様。しかし、Ya‘qūbī（I,p.66）では、上記のヨシャファトの子ヨラムは40年王位にあったとなる。後半部は、ユダの王ヨラムの子アハズヤならば、在位は列王記下8:25〜26、歴代誌下22:1〜2やYa‘qūbī（I,pp.66〜67）と同様。しかし、イスラエルの王アハブの子アハズヤならば、在位は列王記上22:51に2年とある。

（10）“イスラエル人（lit.彼ら）の〈王となり〉”が、‘Abd al-Ḥamīd版では“彼（＝ヨラム）の後〈王となり〉”、また“残らなかった”が、“助からなかった”。この部分は列王記下11:1〜3、歴代誌下22:10〜11やYa‘qūbī（I,p.67）と同様。Ṭabarī（I,p.637）もアタルヤがアハズヤではなくヨシャファトの後に支配したという記述（上記の注8）以外は、マスウーディーと同様。

（11）列王記下11:4〜16、歴代誌下23:1〜15やYa‘qūbī（I,p.67）と同様。Ṭabarī（I,p.637）では、この少年、すなわちヨアシュ（Yuwāsh）と彼の仲間たちが殺したとある。

（12）アタルヤの在位は列王記下11:3〜16、歴代誌下22:12〜〜23:15や、Ya‘qūbī（I,p.67）、Ṭabarī（I,p.637）と同様。

（13）列王記下12:1、歴代誌下24:1やYa‘qūbī（I,p.67）と同様。そして彼の名は列王記下11:2、歴代誌下22:11や、Ya‘qūbī（I,p.67）、Ṭabarī（I,p.637）ではアハズヤの子ヨアシュとある。

（14）列王記下12:2、歴代誌下24:1や、Ya‘qūbī（I,p.67）、Ṭabarī（I,p.637）と同様。

（15）【　】はPellatによるもので、この訳出部分は、やはり‘Abd al-Ḥamīd版にはない。アマツヤに関して聖書にはヨアシュの子で、ユダの王（列王記下12:21,14;1、歴代誌下24:27）として29年世を治めた（列王記下14:2、歴代誌下25:1）とあり、Ṭabarī（I,p.637）も同様だが、Ya‘qūbī（I,p.67）では27年とある。そしてウジヤに関しては、歴代誌下26:1（アマツヤの子で王となる）、同26:3（52年世を治める）［列王記下（14:21,15:1〜2）ではアザリヤ］や、Ya‘qūbī（I,p.68）、Ṭabarī（I,p.637）と同様。

（16）Ya‘qūbī（I,p.67）と同様。イザヤ書6:1（ウジヤ王の没年に召命を受けた）や歴代誌下26:22（ウジヤの事績を書き残した）も参照。そしてマスウーディーは下記の§111において、イザヤはマナセ（ウジヤから4代後、會々孫）に殺されたとする。またṬabarī（I,p.637）には、ウジヤの會孫ヒゼキヤの時代［本稿§110］にイザヤが登場するが、これは列王記下19:2〜7,19:20,20:1〜11,20:14〜19、歴代誌下32:20に従ったもので、Ya‘qūbī（I,p.69）にも見られる。次文の“数多くの”が‘Abd al-Ḥamīd版にはない。

（17）聖書では、ウジヤの子ヨタム（列王記下15:32、歴代誌下26:23［列王記下15:7ではアザリヤの子］）が16年エルサレムで世を治めた（列王記下15:33、歴代誌下27:1,27:8）とあり、Ya‘qūbī（I,p.68）やṬabarī（I,p.637）も同様。

（18）ヨタムの子アハズの王位は列王記下15:38、歴代誌下27:9や、Ya‘qūbī（I,p.68）、Ṭabarī（I,p.637）と同様。またアハズの行状は列王記下16:2〜4、歴代誌下28:1〜4やYa‘qūbī（I,p.68）と類似。

（19）歴代誌下28:5〜21では、シリアの王やイスルラエルの王やエドム人などがアハズを撃ち破り、その民の多くを捕虜にしたので、アハズはアッシリアの王ティグラト・ピレセルに助けを求め、アッシリア王が彼の所にやって来たとあり、また列王記下16:7〜9では、アッシリアの王ティグラト・ピレセルはアハズの願いでダマスカスに攻め上り、シリアの王を殺したとある。Ya‘qūbī（I,p.68）では、アッラーはバビロンの王ティグラト・ピレセル（Bal‘aqīs?）がアハズを支配するようにし、ピレセルはアハズを捕虜にし、パレスティナにある10支族の町を破壊した、云々とある。

（20）次文まで、Ya‘qūbī（I,pp.68〜69）により詳しい記述がある。サマリア人はクルアーンでは、黄金の子牛を造ってイスラエル人を迷わせ、モーセに立ち去れと言われたas-Sāmirī（20:85,20:87〜88,20:95〜97）という人物名で登場する。

（21）ラムラはエルサレムの西北西40km強にあり、当時はパレスティナの中心都市。アーラーはMeynardとCourteilleはal-Ghārā（或はal-Ghārī）と読み、次のナブルスの南側にあるGerizim（ゲリジム）が短くなった形とみる（*Maçoudi*, I,p.399）。詳しくは下記の注22を見よ。ナブルスはエルサレムの北48km強。

（22）トゥール・パリーク（祝福された山）とは、申命記11:29,27:12に祝福の山と記されるゲリジム山で、サマリア人はこの山で礼拝した（ヨハネによる福音書［以下、ヨハと略記］4：20）とされる。海抜

881m。Yâqût（"Ṭûr", IV,p.47）参照。

(23) 引用部はクルアーン20:97。

(24) "ヤコブ"が'Abd al-Ḥamîd版では"預言者ヤコブ"。

(25) ドゥースターンはサマリア人の宗派で、Dûsis或はDustis（ギリシア語Dositheos）が創始者とされる（Ayala Loewenstamm, "Dustan", *Encyclopaedia Judaica*, Ⅵ, p.314)。クーシャンは不明。

(26) "世界の無始"が'Abd al-Ḥamîd版では"世界"。

(27) "バビロン人"が'Abd al-Ḥamîd版では"バビロン王"。列王記下16:2以下、歴代誌下28:1以下では捕虜の記述がなく、在位は16年とあり、Ṭabarî（I,p.637）も同様。捕虜の記述（上記の注19）がある Ya'qûbî（I,p.69）も16年とある。

(28) ヒゼキヤの王位に関しては、Ya'qûbî（I,p.69）の他、列王記下16:20,18:1、歴代誌下28:27やṬabarî（I,p.637）と同様。

(29) Ya'qûbî（I,p.69）や、列王記下18:3～6、歴代誌下29:2～～31:21と同様。

(30) 前半部（センナケリブの進攻）はYa'qûbî（I,p.69）と同様。列王記下18:13～～19:34、歴代誌下32:1～19やṬabarî（I,pp.643,650）参照。

(31) "イスラエル人は…殺した"が、'Abd al-Ḥamîd版では"彼（＝センナケリブ）に従う多数の者が殺された"。列王記下19:35（主の使いが出て、アッシリアの陣営で185000名を撃ち殺した）や歴代誌下32:21参照。Ya'qûbî（I,p.69）やṬabarî（I,p.643）も列王記の記述と同様。

(32) "29年"が、'Abd al-Ḥamîd版では"27年"。列王記下18:2、歴代誌下29:1やṬabarî（I,p.643）も29年。Ya'qûbî（I,p.69）では27年。

(33) 前半部は列王記下20:21、歴代誌下32:33やṬabarî（I,p.643)、後半部は列王記下21:2～16、歴代誌下33:2～9、そして前後半部ともYa'qûbî（I,p.69）と同様。"王国の全住民を覆った（ghamara）"が、'Abd al-Ḥamîd版では"王国の全部に広まった（'amma）"。

(34) 次文までYa'qûbî（I,pp.69～70）と同様だが、歴史上のコンスタンティヌスはⅠ世でも在位が280～337年であり、Ya'qûbîやマスウーディーのソースは誤解している。聖書（歴代誌下33:11）では、主はアッシリア王軍に攻めさせ、マナセは捕えられてバビロンに引いて行かれたとある。

(35) 歴代誌下33:12～13では、悔い改めて主に祈ったので、エルサレムに帰されたとあり、Ya'qûbî（I,p.70）も同様［但し、エルサレムの代わりに王位］。"ルーム人の手中"が、'Abd al-Ḥamîd版では"ルーム人の地"。

(36) Ya'qûbî（I,p.70）では王位の期間が55年で、捕虜の期間が20年とある。そして列王記下21:1、歴代誌下33:1にはマナセは55年エルサレムで世を治めたとあり、Ṭabarî（I,p.643）も同様。

(37) 王位は列王記下21:18、歴代誌下33:20やṬabarî（I,p.643)、以下は列王記下21:20～22、歴代誌下33:22～23、そして王位と偶像崇拝はYa'qûbî（I,p.70）と同様。

(38) 聖書によれば、エジプト王が攻めて来たのは、アモンの子ヨシヤの治世であり（列王記下23:2、歴代誌下35:20～249)、捕虜にされて、エジプトへ連行されたのは、ヨシヤの子ヨアハズである（列王記下23:34、歴代誌下36:4)。Ya'qûbî（I,p.70）やṬabarî（I,p.643）も聖書と同様。より詳しく言うと、聖書では、アモンの後、息子のヨシヤが父とは異なり、主の道を歩み、31年間エルサレムで王位にあったが、エジプト王ファラオ・ネコのアッシリア遠征の途中で殺され、ヨシヤの子ヨアハズが3か月間エルサレムで王位にあったが、主の道を歩まず、ファラオ・ネコに幽閉され、エジプトに連れて行かれ、そこで死んだとある（列王記下22:1～～23:34)。そしてYa'qûbî（I,p.70）では、アモンの子ヨシヤ（Yûshiyâ）がアッラーを崇拝し、偶像を壊すなどして、30年間王位にあり、その後、息子のヨアハズ（Yahawâkhaz）が3か月間王位にあった後、'足の不自由なファラオ'に捕虜にされ、エジプトに連れて行かれ、そこで死んだとある。またṬabarî（I,p.643）では、アモンの子ヨシヤが'足の不自由なファラオ'に殺されるまで31年間王位にあり、ヨシヤの子ヨアハズがこのファラオに攻められ、捕虜にされ、エジプトに連れて行かれたとある。それゆえ、この箇所はマスウーデイー或は筆耕の一人の誤解であろうか。

(39) 聖書では、アモンはエルサレムで2年世を治めた（列王記下21:19、歴代誌下33:21）が、家来たちに殺された（列王記下21:23、歴代誌下33:24）とあり、Ṭabarī（I,p.643）では12年統治し、家来たちに殺されたとなる。Ya'qūbī（I,p.70）では16年統治したとある。結局、マスウーディーはアモンの次に王位に就いた息子のヨシヤと、その後に王位に就いたヨアハズを抜いている。

(40) "彼がアモンから上記注38のヨアハズに変われば、Ya'qūbī（I,p.70）と同様な記述となる。ヨヤキムに関しては、聖書でもファラオ・ネコがヨアハズを廃し、ヨアハズの兄弟エルヤキム、即ちヨヤキムを王に立てたとある（列王記下23:33〜34、歴代誌下36：3〜4）が、Ṭabarī（I,p.643）ではファラオはヨアハズの子ヨキヤムを王にしたとある。

(41) やはりYa'qūbī（I,p.70）と同様。聖書ではダニエルはユダ族出身ではあるが、ユダの王ヨヤキムの子ではない（ダニエル書1：1，6）。また、マスウーディーは他の箇所では、小ダニエル（Dāniyāl al-Aṣghar）はキュロス（Kūrush）の母方のおじ（§551）、大ダニエル（Dāniyāl al-Akbar）はノアとアブラハムの間の時期にいた（§552）とする。Ibn Qutayba（p.49）では、ダニエルはネブカドネツァルに夢解きをし、最上の地位にあったとあり、Ṭabarīでは、3名の仲間の少年他と共にネブカドネツァルによって連れて行かれ（I,pp.647,665,717）、夢解きをする（I,pp.667〜68）とあり、聖書のダニエル書に準ずる［但し、Ṭabarī（I,p.654）ではキュロスによって法官を任され、ネブカドネツァルがエルサレムから奪った物品を元に戻すよう命じられたともある］。

(42) 列王記下24：1、歴代誌下36：6、ダニエル書1：1や、Ya'qūbī（I,p.70［"イスラエル人"の代わりに"エルサレム"］）に準ずる。しかし、Ṭabarī（I,p.643）では、ヨヤキム（Yūyāqīm）の子ヨヤキン（Yūyāḥīn）の在位3か月後にネブカドネツァルが攻めて来て、ヨヤキンを捕虜にし、バビロンに引いて行ったとあり、列王記下24：8〜15に準ずる記述となる。

(43) 前半部はṬabarīに、ペルシア語名をBukhtrashahというネブカドネツァルはペルシア王Luhrāsbの命令でイスラエル人に対して派遣された（I,p.645[但し、イスラエル人の王が誰かは無記]）とか、ネブカドネツァルはal-Ahwāzとar-Rūmの地との間の総督（iṣbahbadh）（I,pp.645〜46[Hiahām b. Muḥammad（d.204〜06/819〜22）に基づく説]）とある。上記の注42の、聖書の3箇所とYa'qūbīでは、ネブカドネツァルはバビロンの王とある。尚、'Abd al-Ḥamīd版では"西方"が"アラブ（al-'Arab）"。後半部はṬabarī（I,p.645）に、Kaykhusrawの後、Kayūjīの子Luhrāsbがペルシア人を支配し、バルフを建設したとある。

(44) Ya'qūbī（I,p.70["イラーク"の代わりに"バビロン"]）と同様。聖書によれば、ネブカドネツァルによるバビロン捕囚は4度あり、ここは前606年のヨヤキムの時の第1次捕囚（歴代誌下36：6）か、次々文（捕虜18000名）が内容の説明ならば、前597年のヨヤキムの子ヨヤキンの時の第2次捕囚（列王記下24:14〜16，歴代誌下36:10）のことか。但し、Ṭabarīでは、イスラエル人の王が平和協定を結び、人質を差し出したことで、彼らはその王を糾弾して殺し、戦いの準備をしたので、ネブカドネツァルはイスラエルの戦士たちを殺し、子供たちを捕虜にした（I,p.646[Hishāam b. Muḥammadに基づく説]）とか、ネブカドネツァルがヨヤキンをバビロンに連れ去り、代わりにおじのゼデキヤ（Ṣidīqiyā）を王に据えるが、ゼデキヤが反逆したので、ゼデキヤに足枷をはめ、併せてイスラエル人をもバビロンに連行した（I,pp.643〜44,651）という、列王記下24:15〜〜25：7に準ずる記述がある。

(45) 前半部（"…井戸に投げ込んだり"まで）はYa'qūbī（I,p.70）と同様。"預言者たちの書や王たちの伝記"が、'Abd al-Ḥamīd版では"王たちの書"。また、後半部は聖書（歴代誌下36：7、ダニエル書1：2）やṬabarī（I,p.666[但し、イスラエル人の王名は無記]）では神殿の器物をバビロンに運んだとある。

(46) Ya'qūbī（I,pp.70〜71）と同様。これは聖書の第2次捕囚の記述に似ている。列王記下24:14〜16には、高官と勇士1万人、職人と鍛冶千人、それに？軍人7千人を捕囚として連れ去ったとある。

(47) Ya'qūbī（I,p.70）と同様。エレミヤに関しては、Ṭabarī（I,pp.646〜48,658〜67[Ibn Isḥāq（下記の注63の最後を見よ）やWahbに基づく]）に、アッラー及びネブカドネツァルとの関係が詳しい。本稿V（第4章訳）注60も参照。聖書ではヒルキヤの子エレミヤ（エレミヤ書1：1）はヨキヤムの父ヨシヤ王

の時代から登場し（エレミヤ書１：２）、ヨヤキムの兄弟ゼデキヤの時代にまで及ぶ（歴代誌下36:12、エレミヤ書１：３）。

(48) Ya'qūbī (I,p.70) や Ṭabarī (I,p.647[但し、エジプト王名は無記]) と同様。列王記下24：７も参照。

(49) 前半部は Ṭabarī (I,p.647) と同様。結局、マスウーディーにはヨヤキンと次のゼデキヤが登場しない。

(50) 聖書ではペルシア王キュロスの命令によってイスラエル人はエルサレムに帰った（歴代誌下36:22～23、エズラ記１～２章）とあり、Ṭabarī ではキュロス（Kîrush）はその母がイスラエル人アビハイル（Ḥâwîl）の娘エステル（Ishtir）であったので、イスラエル人をエルサレムに帰した（I,p.644）とか、ジャーマースブ（Jâmâsb）の子キュロスの子アシハュエロス（Akhashwîrush,クセルクセス[但し、I,p.644では、アスブ（Asb）の子ジャーマースブ自身]）がイスラエル人アビハイルの娘エステルと結婚し、キリスト教徒の主張では、彼女はキュロスを生んだ（I,pp.653～54）とある［聖書のエステル記２：15～17に、彼女はペルシア王クセルクセス治世の第７年に王妃となったとはある］。また下記の注55の Ya'qūbī も参照。そして歴代誌下36:21に従うと、70年ぶりの帰郷となろう。

(51) 次文の前半部まで、Ya'qūbī (I,p.71) と同じ。聖書ではエズラ書３：２，３：８，４：２，５：２などに、シェアルティエルの子ゼルバベルが、神殿の建設の中心的役割を果す、政治的指導者として登場する。またハガイ書２：２，２：20にはユダの総督とある。Ṭabarī (I,p.688) ではペルシア王 Bahman は自分の女奴隷ラハブ（Rāḥab）の兄弟ゼルバベルをイスラエル人に対する王に任命し、Rāḥab の求めに応じて、彼をパレスティナに帰したとある。

(52) Ya'qūbī (I,p.71) ではゼルバベルがネブカドネツァルの埋めた井戸からトーラーと預言者たちの書を取り出したとある。

(53) Ya'qūbī (I,p.71) ではゼルバベルは46年かかって神殿を建て、トーラーと預言者たちの書を初めて成文化したとある。

(54) “亡くなるまで”が、'Abd al-Ḥamīd 版では欠けている。

(55) Ya'qūbī (I,p.71) にもネブカドネツァルがシェアルティエルの娘 S.yḥ.b と結婚し、彼女の頼みでイスラエル人を故郷に帰したとある。'Abd al-Ḥamīd 版ではこの文の後に、括弧扱いだが、“このことは検討を要する”が続く。

(56) “［アッラーの］友”が、'Abd al-Ḥamīd 版では欠けている。

(57) Ṭabarī (I,p.352[Ibn Isḥâq に基づく説]と同様。

(58) 創世記25:13～15や Ya'qūbī (I,p.253[但し、ケダル、ネバヨトの順])、Ṭabarī (I,pp.351～52[Ibn Isḥâq に基づく説だが、ハダトの後は、エトル、ナフィシュ、テマ、ケデマの順]) と同様。また 'Abd al-Ḥamīd 版では“ケデマ”が７番目？に入る。

(59) 後半部は Ṭabarī (I,p.352) と同様。次文は注61も参照。

(60) 彼の生涯は創世記25:17や Ibn Qutayba (p.34) と同じ。Ya'qūbī (I,p.253) では130歳、Ṭabarī (I,p.352) には130歳説と137歳説が挙がっている。後半部に関しては、Ibn Qutayba (p.34)、Ya'qūbī (I,p.253)、Ṭabarī (I,p.352) には、ヒジュル（al-Ḥijr）—或はその石（al-ḥajar)、即ちカアバ神殿の黒石か—に葬られたとある。

(61) Ibn Qutayba (p.34) と同様。Ya'qūbī (I,p.253) ではネバヨト説の他に、ケダル［そして、ケダルの後はネバヨト］説が挙がっている。“彼のやり方”の後に、'Abd al-Ḥamīd 版では“及び彼の儀礼”が加わる。

(62) エレミヤに関しては§113（注47)、ダニエルに関しては§112（注41）を見よ。エズラはクルアーンでは、ユダヤ教徒がアッラーの息子と言ったとある（9:30)。Ibn Qutayba (p.50) では、トーラーが焼かれた後、エズラはシリアに帰った時、イスラエル人のためにトーラーを定めた者で、ユダヤ教徒の一派は彼をアッラーの息子だと言うが、彼は霊的交信に優れ、アッラーは彼を預言者から外したが、彼は使徒であるとなり、Ṭabarī (I,pp.669～70) では、トーラーが消滅していることを嘆いたエズラに、或る天使が器の水を飲ませると、トーラーがエズラの意識に姿を現し、エズラはイスラエル人のためにそれを書き留めたとか、時が経つにつれて、イスラエル人はエズラをアッラーの息子とみなすようになったとある。聖書

ではエズラ記の中心人物で、アルタクセルクセス王の第7年に、イスラエル人の一団と共にバビロンからエルサレムに帰り、主の律法を研究して実行し、イスラエルに掟と法を教えることに専念した、祭司で書記官（7：7〜11）とある。通常、エズラはユダヤ教再興の祖と見られている。

(63) ヨブに関しては§84（注53）、イザヤに関しては§108（注16）、エゼキエルに関しては§97（注125）、ヨナに関しては§105（注172）、ヒドルに関しては§85（彼＝エレミヤ説も、注60）をそれぞれ見よ。エリヤはクルアーンでは義しい人（6:85）で、その民がバアル（Ba'l）に祈るのをやめさせようとした使徒（37:123〜32）とあり、Ibn Qutayba（p.51）では、ヌンの子ヨシュア支族に属し、バアルを崇めるBa'labakk［ベカー平原の、現レバノン領バアルバックのことか］の住民に遣わしたとある。Ṭabarī（I, pp.540〜44[Ibn Isḥâq に基づく]）では、アッラーはエゼキエルの後、乱れたイスラエル人に対して、アムラムの子アロンの子エルアザルの子ピネハスの子 Yâsîn の子エリヤを預言者として遣わしたとある以外は、以下に言及する聖書にほぼ準ずる。聖書でもイスラエルのアハブ王のバアル崇拝を面責した、アハズヤ王の治世まで活動した預言者（列王記上17〜19章、21:17〜29、列王記下1〜2章）で、イエスの山上の変貌の際に預言者の代表として現れる（マタイによる福音書［以下、マタと略記］11:14、17:3〜4、17:11〜12、ルカによる福音書［以下、ルカと略記］1:17）。尚、マスウーディーには、Nizâr の子 Muḍar の子にもエリヤという人物が登場する（§1447）が、これは別人である。エリシャはクルアーンでは世に秀でた人（6:86）で、優れた人（38:48）とあるに過ぎない［いずれも彼を al-Yasa' と表記］が、Ibn Qutayba（p.52）や聖書ではイスラエルにおけるエリヤの預言活動の後継者（列王記上19:16〜21、列王記下2章、3:11〜〜8:15,13:14〜21など）とある。Ṭabarī では、主を信じないイスラエル人たちに旱魃をもたらしたエリヤを或るイスラエル女性が匿い、Akhṭûb の子エリシャという、彼女の負傷した息子を、エリヤが主に祈って直したので、エリシャはエリヤを信じて、彼について行った（I,p.542）、そしてエリヤの後、エリシャがイスラエル人の預言者となった（I,p.544）、また、エリシャこそ、サウルに彼の悔悟について知らせるために墓の中から甦った預言者だ（I,p.559）［いずれも Ibn Isḥâq や Wahb に基づく］とある。ズー・ル＝キフルは、文字どおりは'分け前の持主'の意と思われ、クルアーンでは忍耐強い人（21:85）、優れた人（38:48）とあるに過ぎないが、Ibn Qutayba（p.55）には、イスラエル人で、彼らのもとにいたカナン（Kan'ân）という王に遣わされ、その王に信仰を説き、王に天国を保証し（takaffala）、アッラーに対する真実の称名の書簡を王に記したので、王は信じ、かのイスラエル人は保証したこと（al-kafâlah）によってズー・ル＝キフルと呼ばれたとある。またṬabarī（I,p.364）では、ヨブの子 Bishr にアッラーが預言者として付けた名で、Bishr は生涯、シリアに留まり、75歳で没したとある。その他、John Walker はズー・ル＝キフルを"2倍（或は2度）の報償を受け取った者"という意味にとり、ヨブのことと考える（"Who is Dhu'l-Kifl?",*The Muslim World*,XVI（1926）,pp.399〜401）が、ムスリムの間では、聖書のエゼキエル説を始め、ヨシュア説、エリヤ説、ザカリア説、更にはオバドヤ（列王記上18：3〜4）説、イザヤ説もある（G. Vajda, "Dhu'l-Kifl", *E.I.*②, II,p.242; I. Goldziher, "Dhu'l-Kifl", *E.I.*①, I,p.962; Thomas Hughes, *The Dictionary of Islam*, London, 1885, pp.114, 475, 717)。イブン・イスハークは歴史伝承家で、本稿(1)のIIIのp.297参照。

(64) Ibn Qutayba（p.52）にマスウーディーとほぼ同じ記述があり［但し、アダクは Âdhan］、マスウーディーの記述はこれに依拠しているのではなかろうか。アダクは不明（イド？）だが、聖書では、ザカリアはアロンの子孫アビヤ（歴代誌上24:10）家に属し、アロン家の娘エリサベトを妻としており（ルカ1：5）、エリサベトは［イエスの母］マリアの親類（ルカ1：36）とあり、Ya'qûbî（I,pp.79,81）にもルカの福音書の記述として同様なものが見られる。ところが Ya'qûbî（I,p.74）では、マリアが生まれた時、彼女の母親ハンナ（下記の注66を見よ）から彼女を手渡されたザカリアは、アムラムの子モーセの子孫で、ベレクヤ（Barakhiyâ）の子とある。またṬabarī（I,pp.711〜12）では、ヨハネの父、ザカリヤはベレクヤの子で、Qabîl の子 Fâqûd の娘エリザベト、即ちハンナの姉妹と結婚していたとある。ヨハネの父でエリサベトの夫であるザカリア（ルカ1章参照）と、ベレクヤ（バラキア）の子である預言者ザカリア（＝ゼカリヤ，ゼカルヤ、ゼカリヤ書1〜8章，マタ23:35など参照）との混同が見られる。クルアーンでは、ザカリアは義しい人（6：85）で、自分の妻はうまずめだが、自分の子を授け給うよう主に呼びかけると、

主がヨハネを授けることを告知し、その御徴として3日間、ザカリアは人々と話すことができなくなった（3：38〜41, 19：2〜11, 21：89〜90）とあり、聖書（ルカ1：5〜22）に準ずる。またクルアーン19:28では、イエスの母マリアに向かって、アロンの姉妹と呼びかけており、マスウーディーはこれに従っている。聖書では、アムラムの娘マリア（＝ミリアム、出エジプト記15:20、民数記26:59）と、イエスの母マリア（マタ1：18, ルカ1：31）とが別の人物として登場する。

(65) Ibn Qutayba (p.52) にも同様な記述［但し、マーラーンはマタン（Mâthân）］があり、マスウーディーはこれに依拠していると思われる。Ṭabarîでは、マリアの父、アムラムはマタンの子とある（I,pp.711〜12）他、アムラムはソロモンの子孫で、マナセの子アモンの子 Yâshiham の子ともある（I,p.712[Ibn Isḥâq に基づく]）。聖書には、ヨヤキムという人物は上記§112に登場したユダの王以外に見当たらず、彼の子はヨヤキン（列王記下24:6）であり、また、アムラムという名はケハトの子（モーセやミリアムの父、出エジプト記6：18）の他、バニ（レビ人で、ゼルバベルと共に捕囚から帰って来た1家族の祖、エズラ記2：10）の一族（エズラ記10:34）としても登場する。

(66) Ya'qûbî (I,p.74) にも、マリアの母はハンナで、アムラムの妻とある。Ṭabarî (I,pp.711〜12) では、アムラムの妻で、マリアの母に当たる、Fâqûd の娘ハンナは、エリサベトの姉妹とある。聖書には、ハンナという名はサムエルの母しか見当たらない（サムエル記上1章）。

(67) ヨハネに関しては、クルアーンでは、アッラーはヨハネに幼少時から知恵を授け、アッラーの慈しみと清浄な心も授け、彼は敬虔にして両親孝行であり（19:12〜15）、アッラーの御言葉の確証者となり、指導者、思慮ある者、預言者にして義しい人の一人となる（3：39, 6：85）。ヨハ1章参照。彼に関するその他のことは、下記の注72を見よ。

(68) Ibn Qutayba (p.52) と同一で、"ユダヤ人は"以下は、Ṭabarî (I,p.734) も類似。またクルアーン3：37では、主はマリアの養育をザカリアにさせたとあり、Ya'qûbî (I,p.74) もそれに従う。

(69) Wahbに拠ると言うIbn Qutayba (p.52) や、Ṭabarî (I,p.734) と同様。

(70) "切り倒し"以下は、Ibn Qutayba (p.52) と同一で、全体はṬabarî (I,p.734) と類似。尚"アッラーの敵"が、'Abd al-Ḥamîd 版では欠け、代わりに"アッラーが彼を呪い給うように"がイブリースに付く。

(71) 参照3文献では、いずれも下記の注82の通り、聖書に従い、マリアとイエスの話となっている。

(72) ヨハネの宣教はマタ3：1〜12、マルコによる福音書［以下、マコと略記］1：2〜8、ルカ3：1〜20、ヨハ1：19〜28参照。ヨハネ殺害は、聖書ではマタ14：1〜12、6：14〜29、ルカ9：7〜9などにユダヤの総督ヘロデが行なったとあり、Ya'qûbî (I,pp.78〜79) でも、ヘロデ（Hîrûdus）の兄弟フィリポ（Fîlifûs）の妻の要求に応じてとあるが、Ṭabarîではイスラエル人の王が姪（I,p.713[Ibn 'Abbâs に基づく説]）と、或は自分の或る妻の娘（I,pp.715〜16[Ibn Mas'ûd 他に基づく説]）と結婚したさに、ヨハネを殺せという彼女の要求を実行したとなる。更に、Ibn Qutayba (p.53) では、ヨハネはアハブ（Aḥab）がその妻イゼベル（Azbîl）の計略に乗せられて殺したとある［列王記上18：4など参照］。

(73) Ṭabarî (I,p.720) にも同様な記述［但し、"Khardûsh"が"Khardûs"、"東方"が"バビロン"］が見られる。ハルドゥーシュとは、ヘロデ（Hîrûdus, Hîrudûs）のことか。またṬabarî (I,p.705) には、イスラエル人がヨハネを殺したので、アッラーは Ashakân[或はSâbûr (I,p.710)]の子ゴタルゼス（Jûdharz, I世の在位は前91〜87年頃、II世の在位は38〜51年頃）にイスラエル人を再び襲わせたともある。更にṬabarîには、ネブカドネツァル説（I,p.657,上記注72のI,p.713）や、Ṣayḥâ'în（ペルシアの伝説上の支配者名）によるネブカドネツァル派遣説（I,p.657[as-Suddî (d.127/744〜45) などに基づく], 上記注72のI,pp.715〜16）も挙がるが、aṭ-Ṭabarî 自身は、ネブカドネツァル説を時代が違うとして否定する（Ṭabarî,I,p.718)。

(74) Ṭabarî (I,pp.720〜23) では、上記注73の続きとして、以下のような説が挙がっている。Khardûs はイスラエル人を敗った時、自分の武将の一人 Nabûzarâdhân に、エルサレム人の血が自陣に流れるまで彼らを皆殺しにするよう命じた。Nabûzarâdhân は神殿に入り、沸き立つ血を見付け、彼らに理由を問いただしたが、彼らの虚言に従って770名の指導者を殺したが、血は静まらず、更に700名の若者、次いで

7000名の息子たちや妻たちを殺したが、やはり血は静まらなかった。そこでNabūzarādhānが皆殺しの脅迫によって問い詰めたところ、遂に彼らは自分たちが殺した洗礼者の血だと告白し、ようやくにして血は静まった。ところが、Nabūzarādhānはイスラエル人のアッラーを信じるようになり、イスラエル人と協力して、彼らの家畜を屠り、その血がKhardûsの陣営に流れるようにして、Khardûsを信じ込ますことに成功した。その他、Ṭabarî（上記注72のI,pp.713,715〜16）では、ネブカドネツァルは或るイスラエル人老婆の教示の下、ヨハネの血が静まるまで70000名を殺したともある。

(75) Ya'qûbî（I,p.74）も同様。次文までクルアーン19:17〜22参照。Ṭabarîには、前半部は13歳説（I,p.711）があるが、後半部は次文まで、Wahbなどに拠るとしてマスウーディーと同様な説（I,pp.724〜25）が挙がっている。ルカ1：26〜27も参照。

(76) Ya'qûbî（I,p.74）も同様。“イエスは…生まれた”が、'Abd al-Ḥamîd版では“彼女は彼を…生んだ”。

(77) クルアーン3：45〜59など参照。

(78) 前半部（ティベリアスのシナゴーグで30年、或は29年間、彼の民の宗教を守り続けた）は不明だが、以下はルカ4：16〜21とYa'qûbî（I,p.82［但し、キリストが30歳になった時とある］）参照。イザヤの書にあったという、この表現はマタ12:18や、同3：17, 17：5にある。“我が息子”が、'Abd al-Ḥamîd版では“我が預言者”。そして次のキリストの言葉中、“アッラーの御言葉”が、'Abd al-Ḥamîd版では“アッラーの御意志”。

(79) Ibn Qutayba（p.53）に同様な説［但し、“an-Naṣrânîyah”の代わりに“Naṣârâ（キリスト教徒）”］が挙がっている。

(80) 次文までマタ4：18〜22、マコ1：16〜20、ルカ5：1〜11参照（イエスは、シモンとその兄弟アンドレ、ゼベタイの子ヤコブとその兄弟ヨハネの、計4名の漁師を弟子にする）。そしてキリストの言はマタ4：19、マコ1：17と同様。尚、Ya'qûbî（I,p.79）では、マルコによる福音書の記述として、キリストは漁師達のうち、シモン（Sham'ûn）とアンドレ（Andarâwis）の2名にかの言葉を言い、この2名が彼に従ったという記述が見られる。

(81) 彼の誕生に関しては、マタ1：18〜2：12、ルカ1：26〜56, 2章や、Ya'qûbî（I,pp.74〜76）、Ṭabarî（I,pp.728〜29）、バプテスマのヨハネに関しては、マタ3：1〜12、マコ1：1〜8、ルカ3：1〜20、ヨハ1：6〜42、イエスの洗礼に関しては、マタ3：13〜17、マコ1：9〜11、ルカ3：21〜22［いずれもヨルダン川にて］や、Ya'qûbî（I,p.76）、40日の誘惑がマタ4：1〜11、マコ1：12〜13、ルカ4：1〜13や、Ya'qûbî（I,p.76）、山上の説教がマタ5〜7章、ルカ6：20〜49などや、Ya'qûbî（I,pp.76〜78）、癩病人を癒す奇跡がマタ8：1〜4、マコ1：40〜45、ルカ5：12〜16やYa'qûbî（I,p.83）［聖書にはその他、身体を癒す奇跡が16］、湖の上を歩く奇跡がマタ14:22〜33、マコ6：45〜52、ヨハ6：15〜21［聖書にはその他、自然を超えた奇跡が8］、悪霊に憑かれたゲラサの人を癒す奇跡がマタ8：28〜34、マコ5：1〜20、ルカ8：26〜39［聖書にはその他、悪霊に憑かれた者を癒す奇跡が5］、ヤイロの死んだ娘を甦らせる奇跡がマタ9：18〜26、マコ5：21〜43、ルカ8：40〜56［聖書にはその他、死より甦らせる奇跡が2］、そして、初期ユダヤ伝道がヨハ2：13〜4：3、サマリア訪問がヨハ4：4〜42、ガリラヤ伝道がマタ4：12〜19：1、マコ1：14〜10：1、ルカ4：14〜9：51、ヨハ4：43〜54, 6：1〜7：1、エルサレム訪問がヨハ5：1〜47、ペレア（ヨルダン川下流東方域）及び後期ユダヤ伝道がマタ19〜20章、マコ10章、ルカ9：51〜19:28、ヨハ7：2〜11:57、受難がマタ21〜27章、マコ11〜15章、ルカ19:29〜24：1、ヨハ12〜19章や、Ya'qûbî（I,pp.84〜88）を参照。クルアーンでは、イエスはアッラーのお許しにより、土で鳥の形を造り、息を吹き込んで鳥にしたり、盲人と癩病人を癒したり、死者を甦らせ（3：49, 5：110）、彼ら（＝ユダヤ教徒）が殺したのでも、十字架に付けたのでもなく、アッラーが御許に召し上げ給うたのであり（4：157〜58）、自分より後にアフマド（一般にムハンマドのこととされる）という名の使徒が来ることを告げる（61：6）とある。クルアーンの引用部分は4：158だが、Ṭabarî（I,p.711）では、キリスト教徒たちはイエスが32歳と数日で召し上げられたと述べたとある。

(82) キリストとマリアとヨセフの苦難話はマタ2：13〜15, 2：19〜23、Ya'qûbî（I,p.76）の他、Ibn

Qutayba（p.53［但し、注72と同様、アハブの時代となっている］）にもある。そしてṬabarīには、聖書と同様な記述（I,p.740）の他に、エジプトへ下って行き、当地で12年間マリアがイエスを隠し続けたが、彼が12歳になった時、最初の奇跡を行った後、マリアはアッラーの啓示を受け、イエスと共にパレスティナへ上がって行ったという記述（I,pp.729〜31）もある。

訂　正

① Ⅲの本文の第2段落（p.288,11.26〜27）『時代の情報、そして…』⇨『時代の情報と、時の運命に滅ぼされた過去の民族やいにしえの世代や消え去った王国の情報』

② Ⅳの本文§49（p.273,1.3）その名はアベルであると考えた者もいるが⇨その名はカービール（Qābīl,カインのこと）であると考えた者もいるが

（1992. 9. 16　受理）